

ニッポンの農林水産業に**元気**を——。

Agrio

J I J I P R E S S

第140号

2016年12月27日

 時事通信社

〒104-8178
東京都中央区銀座 5-15-8

<http://www.jiji.com>



『イオン子会社、欧州型オーガニック目指す』

＝若い生産者、消費者の増加に期待＝

- | | | | |
|-----------------------------|------|------------------|------|
| ◆ 巻頭記事 | …P2 | ◆ 農と食のコラム | …P14 |
| オーガニック特集① | | 農業の現実を本当に理解しているか | |
| イオン子会社、欧州型オーガニック目指す | | ◆ アグリ討論席 | …P15 |
| ～バイオセボン・ジャポン 土谷美津子社長インタビュー～ | | 不足払い立法の精神をたどる | |
| ◆ トップニュース | …P6 | ◆ 週間ニュースファイル | …P17 |
| ◆ トピックス | …P7 | 農林水産行政 | |
| オーガニック特集② | | グローバル | |
| フランスでは100%オーガニックの食生活可能に | | 海外アグリ | |
| オーガニック特集③ | | アグリ・フード産業 | |
| オーガニックは日本の暮らしを変えるか | | ◆ マーケットアイ | …P23 |
| ◆ 政策情報 | …P13 | 緊急時の農家所得保障 | |
| 政策現場から一大阪府泉南市民生活環境部参事 | | ◆ マーケット情報 | …P25 |
| | | ◆ 付録 | …P27 |

【オーガニック特集③】

オーガニックは日本の暮らしを変えるか

＝初のオーガニックライフスタイルEXPOに2万人が来場＝

—フリーライター・則竹知子—

11月18、19日の2日間にわたり東京国際フォーラムで、初めての「オーガニックライフスタイル E X P O」（主催：一般社団法人オーガニックフォーラムジャパン）が開催された。同 E X P O は、日本にオーガニックが本当に根付くための好機を迎えているとの認識から、「国内のオーガニックを基本としたライフスタイルビジネスの健全な発展とさらなる啓蒙（けいもう）普及」が目的だという。「衣・食・住」の生活全体を対象とし、品目は有機食品だけでなく、オーガニックコスメ、環境に配慮して製造された生活雑貨（繊維製品やアロマなど）など広範囲にわたる。出展者数190余りで食品が4割強、コスメと生活雑貨が各2割強を占めた。また30以上のセミナーとイベントが企画され、一般消費者を含め両日合わせて2万人近くが来場した。

◇アジアがオーガニック3.0の先頭に

初日、イベントの皮切りとして、メインステージで「オーガニック3.0～オーガニックの新たなステージ開幕」と題する講演とトークセッションが行われた。

主催のオーガニックフォーラムジャパンの徳江倫明会長がまず、オーガニックの歴史を概観。「オーガニック1.0は、1950年代から60年代にかけては農薬や化学肥料がたくさん使われるようになり、土がダメになると思った生産者の中から立ち上がった人たちが有機農業、自然農業を広げようと動いてきた時代。1970年代になると主婦などが生産者と直接契約をして有機農産物を作ってもらい動きが始まり、オーガニック2.0は、そこから『大地を守る会』や生活協同組合といった組織が有機農家と提携して消費者に届ける専門流通の形で有機農業が広がっていった時代。世界でも有機農産物の基準が作られるようになり、日本では2000年に有機 J A S 制度が新設された。有機農産物は一般のスーパーマーケットなどで販売されるようになり、市場としてはある程度広がった。しかし、このオーガニックの流れの中で取りこぼしてきた、もっと大事なものがあるのではないかと気が付いた。オーガニック3.0は、私たちはなぜ今オーガニックをやっているのか、なぜオーガニックの市場を広げようとしているのかを改めて考えるところから始まった。その根底にあるテーマが環境と持続可能性だ」と振り返った。

続いて、I F O A M(国際有機農業運動連盟)アジア代表のDr. Zhou Zejiangさんがアジアの有機農業の状況を解説した。I F O A Mとは、国際的な規模で有機農業の普及に努めてきた草の根の会員組織として1972年に設立され、その地域組織の一つが I F O A M アジアだ。有機農業が行われている国は、99年から2014年にかけて77カ国から172カ国と増加、有機圃場の面積は増えている。興味深いのはアジアの有機圃場の割合は世界の8%しかないのに、有機生産者は40%を占めていること（2014年）。これは小規模農家が多いことを意味しているが、それでも近年、中国や韓国は成長率が30%を超える勢いで力強く発展していると、Zejiangさんは「アジアがオーガニック3.0の先頭に立っていく」と強調した。

同じく I F O A M の日本組織である I F O A M ジャパンの村山勝茂代表理事は、日本で有機農業が伸び悩んでいる背景について、「認証制度の基準が高すぎた。オーガニックで最も大事な持続性を確保できていたか」と問いかける。そして、「有機農業で食べ物を自給し、持続性を確保するにはどうしたらよいか。I F O A M



オーガニック3.0について講演する徳江倫明氏

ではオーガニックの原則として生態系、健康、公正、配慮の4項目を掲げている。これらを踏まえ、分野を超えたネットワークで情報を交換し、協力し合うことが重要だ」と訴えた。



パネルディスカッションの様子

◇都市と地域を農業や食べ物でつなげていく

パネルディスカッションでは、「株式会社金沢大地」代表取締役の井村辰二郎さん、「安心農業株式会社」代表取締役で生きもの認証推進協会理事の藤井淳生さん、「株式会社坂ノ途中」代表取締役の小野邦彦さん、GOTS（オーガニックテキスタイル世界基準）地域代表の三好智子さんの4人を迎え、それぞれの地域での取り組みを紹介し、オーガニック3.0とのつながり、新しい時代にフィットしたオーガニックのあり方に関して語り合った。

金沢市郊外と能登エリアで有機農業を営む井村さんは、自らの農産物で加工品も作っている。「地域の農業がどうやったら再生産できる仕組みを作っていけるか。これをテーマに都市と地域の関係性を農業や食べ物でつなげていくために、地域で取り組んでいきたい」と意気込みを語った。

千葉で小さな農場を経営しながら、有機の周辺という形でGAP（生産工程管理）や生物多様性の認証事業などを手掛けている藤井さんは「オーガニック2.0の申し子のような存在で、長く農産物の基準作りや現場で審査をする仕事をしてきた。基準認証の仕組みには広がりがないと感じるようになり」、有機認証だけにこだわらないオーガニック3.0に注目している。

京都を拠点に野菜の販売をしている小野さんは有機農業に取り組む新規就農者などと提携し、農産物の販路を確保する仕組み作りを行っている。4年前から海外でも有機農業の普及活動にも関わり、複数の企業が連携して、オーガニックが広がる取り組みにもチャレンジしている。「持続可能な社会にするためには、地域内で資源循環させていだけでなく、地域間での連携も大切」と訴える。

三好さんはテキスタイル、繊維製品の有機認証の基準作りを行っている。「消費者と生産者の距離が長くなりがちなのが繊維製品。日本の服の自給率はほぼゼロ。そういう中で責任ある調達、世界に与えるインパクトを考える必要がある。ほかの業界、世界とつながっていくことが大切で、伝えようという熱意、知ろうという好奇心を持ち続けたい」とその思いを語った。

◇安さではなく、おいしさ、健康

「ローカル＆オーガニックの特色ある売り場づくり」と題するセミナーでは、特徴のある3店の代表がそれぞれの店作りの特徴を語った。東京都羽村市に本社がある「福島屋」は、調理講座を毎日開催しているという。福島徹会長は「当社の自然環境循環マーケティングは、お客さまと接する中で、どう食べて、どう生きていったらいいのかを一緒に考えることがベースになっている。消費者の生活に近いところで食べ物を作ろうという思いから、パンやハムなど店で作るのが基本。ただし一番おいしいのはお客さま自身で作ること。そこから調理講座を始めることになった」と話す。

群馬県にあるスーパー「まるおか」の丸岡守代表取締役は1店舗ということにこだわりを持っている。同社の店舗内には「もっと固いものを食べよう」など手書きのキャッチコピーが至るところにある。経営理念はおいしさと健康の追求で、「安さではなく、自分が食べたいもの＝おいしいものを売



則竹 知子（のりたけ ともこ）

愛知県出身、奈良女子大学文学部卒
1999年よりフリーのライターとして活動
飲食、旅、健康、医療、ペット、アウトドア、マーケティング、各種インタビュー等幅広いジャンルを取材執筆
近年は地域の食文化に興味をもち、現場に足を運ぶ
自らも茨城の農場にて大豆づくりを、また、耕作放棄地の開墾、コメ作りに携わる